



Title	W. B. Yeats論 : Last Poemsの世界
Author(s)	川上, 武志
Citation	北海道教育大学紀要. 第一部. A, 人文科学編, 30(2): 155-162
Issue Date	1980-03
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/4087">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/4087</a>
Rights	

W. B. Yeats 論  
—— *Last Poems* の世界 ——

川 上 武 志

*The Words upon the Window-pane* (1934) で、Yeats は晩年の Swift の狂気の原因は、貴族主義の崩壊が民主主義・ルソー・フランス革命によってもたらされると予見した事であったと述べ、Swift の墓碑銘 'He has gone where fierce indignation (saeva indignatio) can lacerate his heart no more.' を史上最も偉大なものであると言う<sup>(1)</sup>。Yeats の Swift に対する好意は、Yeats が 18 世紀の農本主義の時代、貴族と農民とが結び付いた文化状況に特に憧れたという理由にもよるが、それ以上に Swift の個性と強烈な生き方に示されたと言ってよいだろう。確かに Yeats が晩年に書いた幾つかの詩には Swift の影が付き纏っている。Swift 風の 'fierce indignation' は、一種のエネルギーの発現であり、死期の間近な詩人が志向する態度であった。これが *Last Poems* を覆っている一つの基調になっている。例えば *Last Poems* のバラッド群は—— Yeats が Swift の時代の精神的遺産を、現代のアイランド農民の中に見いだしたこともあって—— 単純さへの帰還を意味するだろう。題材が性的であれ政治的であれ、簡潔なものには始原的エネルギーが内包されるからである。

しかし我々が 'Under Ben Bulbin' の結びとなっている Yeats の墓碑銘

*Cast a cold eye  
On life, on death,  
Horseman, pass by!*<sup>(2)</sup>

に出会うとき、歴史の輪廻を期待して貴族の象徴であり、又妖精界を駆けるという '騎士' に退出を命じている様にも見える。果して、この墓碑銘は英雄的であろうとした詩人自身の挽歌なのだろうか。生と死に投げ掛けられる冷徹な視線は、'fierce indignation' を含むのであろうか。筆者はこの小論で、Yeats の晩年 3 年間の作品 *Last Poems* を中心に、その悲劇的相を検討してみようと思う。

(テキストの問題がある。Macmillan 版の *Last Poems* のうち 'The Gyres' から 'Are You Content' 迄の詩は *New Poems* という題で 1938 年に Culala Press から出版されたものであり、*On the Boiler* の 3 篇を別にした残りの詩は、Yeats の死の直後に *Last Poems and Two Plays* という題の下で発表されている。この間に詩的推移がもしあるとすると、どの様なものであろうか。)

(1)

A *Vision* に従って Yeats の晦渋な史観を要約すると、2000 年周期内における客観的・本源的

(‘objective’, ‘primary’) 時代と主観的・対照的 (‘subjective’, ‘antithetical’) 時代の交代であり、この間には 28 相に分けられる客観と主観の量の増減の連続的変化がある。彼はこれを相反して回転する二つの輪 (gyres) の組み合わせというダイアグラムを使って説明している。それによると現代は抽象化作用の期間に当る第 23 相に属していて、その後増々本源色を強めて行くという。現代社会が向かう方向は、*Purgatory* の陰惨で異様なムードに最も象徴されているが、そこに描き出されるのは徹底した文明の破壊である。Yeats は時代の荒廃の責任は、現代の平均化し対立を持たない中産階級にあると常に主張する。*On the Boiler* の ‘To-morrow’s Revolution’ では次の様に言う。

Since about 1900 the better stocks have not been replacing their numbers, while the stupider and less healthy have been more than replacing theirs. Unless there is a change in the public mind every rank above the lowest must degenerate, and, inferior men push up into its gaps, degenerate more and more quickly<sup>(3)</sup>.

*Last Poems* でも Yeats が ‘大衆の反逆’ に直面するとき、殆ど同一内容のフレーズが現れている。例えば、‘Base drove the better blood’ (‘The Statesman’s Holiday’), ‘On gangling stocks grown great, great stocks run dry’ (‘A Bronze Head’), ‘Base-born products of base beds’ (‘Under Ben Bulben’) 等。これに反して彼が自分の家系の貴族性について、何度も繰り返すのはいささか異様な程であるが、アリストクラシーを信じていた者にとっては真剣であった。Yeats の ‘善悪の観念’ からすると秩序や美が正であったが、*Last Poems* でも究極の目論みは秩序の回復にあった。そして彼が文明の退廃を歌うときに、対抗して用いられるのは、‘石’ のアイコンである。(石も無論、多くの異体を持ち、時によってブロンズや大理石等に形を変える。) この石化の傾向で、Yeats は現代の無定形 (formless) に対する定形 (form) の回復を意図しようとする。

20 世紀世界の無秩序に対する石の象徴の例として、‘A Bronze Head’ を見てみよう。詩は Yeats の嘗ての恋人である Maud Gonne の生涯を中心にして展開されるが、

Or else I thought her supernatural ;  
As though a sterner eye looked through her eye  
On this foul world in its decline and fall ;  
On gangling stocks grown great, great stocks run dry,  
Ancestral pearls all pitched into a sty,  
Heroic reverie mocked by clown and knave,  
And wondered what was left for massacre to save<sup>(4)</sup>.

ブロンズ像は亡き Maud の老年の顔——時間による美の破壊——がモデルになっていることで ‘human’ であり、永遠界から狂気にある Lear の様に現世を眺めるので ‘supernatural’ でもある。その眼差は Yeats の好む高みに在る鳥の目であり、墓碑銘の目の様に厳格であり、現世の墮落に対して *Hysterica passio* を内在させている。この目に虐殺で世界が救われるかと問わせる Yeats は如何にもアイロニカルだが、時代の車輪 (gyres) の回転の不可避を見ているからであろう。

‘The Statues’ では石のアイコンと文明の関係を、‘A Bronze Head’ よりもっと大きな視野から見ている。つまり時間のスパンを 2000 年間の文明に拡大しているのだが、この詩は *A Vision* の哲学に基づく美術史であると云って差支えないだろう。取り扱われるのが彫刻であるのは表題が物語っ

ている。そして交錯する本源と対照に相当するのは、アジアとヨーロッパ（アジアとの接点となっているギリシア）である。Ellmann は Yeats のアジアとヨーロッパの見解を、

……he conceived of Asia as having the positive values of simplicity, naturalness, prescribed duties, and tradition, and the negative attributes of formlessness, vagueness, immensity, abstractness, asceticism, and submissiveness……Europe, on the other hand, stood for history, measurement, flesh, metaphor, concreteness, and aggressiveness<sup>(6)</sup>.

といった具合に適当にまとめている。Yeats は *A Vision* でもはっきりと本源的なものにアジア的なものを対応させているが、'The Statues' では対照的・定形のヨーロッパと本源的・無定形のアジアの対立と影響の弁証法的展開がある。この詩で先ず、サラミスの海戦でのギリシアの勝利を、ピタゴラスの数理を基礎としているギリシア彫刻 (form) のアジア (formlessness) に対する勝利と見做し、それを形象化した芸術家の想像的情熱の偉大さが称えられる。ギリシアにあって、芸術家の手によって数量 ('measurement') に想像力による肉化が施され、美が産み出されたと言うのである。続いてギリシア美術の東洋への伝播と影響に移るが、Yeats はヨーロッパが数量の抽象のみに始終することを危険だと考えた。少なくとも Buddha の空虚な眼球は抽象化の意味を知っていると、この視点を変えた東洋からの西洋批判に、Yeats の想像力に幾可学的形式の下に常に肉体を見いだすという感覚がある事が分かる<sup>(6)</sup>。'The Statues' の複数形は、基本的にはギリシア彫刻と仏像の対立であるが、最終連では先きに述べた本源色を強める現代の相と抽象化の進行に対峙するアイルランド彫刻が並べられる。

When Pearse summoned Cuchulain to his side,  
What stalked through the Post Office? What intellect,  
What calculation, number, measurement, replied?  
We Irish, born into that ancient sect  
But thrown upon this filthy modern tide  
And by its formless spawning fury wrecked,  
Climb to our proper dark, that we may trace  
The lineaments of a plummet-measured face.<sup>(7)</sup>

神話の英雄である Cuchulain とイースター革命の指導者 Pearse とのアイデンティティにギリシアが結合する。この結合は、Yeats がケルトの祖先をエジプトに辿れると考えていたという事で説明がつくとして、ギリシア的均衡美と情熱をアイルランド固有の物に見いだそうということである。要するに価値の相対化に対する Yeats の反対願望の表明になるが、彼は所謂伝統的ヨーロッパ世界とこれを受け継ぐアイルランドの救済を望んでいた。この詩には歴史の必然としての世界の崩壊と無秩序に対して、やはり定形 (form) の強調がある。が Auden が *The Prelude* の分析で、「幾可学的真理」の象徴だとする石に 'passion, which itself/Is highest reason in a soul sublime' に支えられる「詩的真理」<sup>(8)</sup> が Yeats にとって付け加わらなければならなかった事も同時に強調されなければならない。

さてアイルランド民族が登る未来には、'dark' が待受けている。しかも宿命的な輪 (gyres) は、周期の終りに近づいている。しかし Yeats には巨大な歴史の形成力を孕む '暗闇' が予測されるだけ

で、'minute particulars'は未知のままである。彼はこの終末の予測の不可能さを自分の死とも一致させて、'dark'という語でよく表現する。例えば'dark betwixt the polecat and the owl' ('The Gyres'), 'No dark tomb-haunter once' ('A Bronze Head'), 'There in the tomb the dark grows blacker' ('The Black Tower')。このように新たに始まる本源の第1相はYeatsにとって未予見であり、超自然的・暴力的な何物かが準備されていて、'the second coming'には荒々しい神が出現するかもしれない。Fryeはロマン派の詩人が神について書こうとするとき、場を持たないか、'上部'比喩より一層確かな'内部'比喩を見つけると述べているが<sup>(9)</sup>、Yeatsをロマン派の系譜の最後に位置付けると、彼の'内部'比喩はBlakeの*The Marriage of Heaven and Hell*の地獄降りの'暗闇'であり、'Proverbs of Hell'の発見のようなりアリティを持たなければならない筈である。自己の位置を高所に置こうとする意識を持つYeatsにとって、'暗闇'への上昇は、ある曖昧さを生じさせている。*Last Poems*にはこういった上昇・下降の奇妙なアンバランスがある。ここではこの問題に立ち入らないが、詩人の疎外感を示していると考えれば十分だろう。つまり時代への所属の不明さがYeatsの悲劇の根底になっている。Stockも「常にYeatsは消失した時代に生きていて、自分がその時代に生きているから、それが現在と同じように実在していると知っている人間のように書いている。だから彼の詩は時間の内側にあると同時に外側にもあるのである。」<sup>(10)</sup>と指摘している。

## (2)

Yeatsは所属させたい時代が持っていたエレメントの消失に、未来での本源相に対する対照的相の流入によって感傷的な慰めを得ようとする。対照的流入はどのような形になるのかは、依然として謎であるが、この流入は必ず起こるのであり、又起こらなければならない。'The Gyres'では、彼は自分の史観を逆手に取って、本源相を飛越えて対照相へと時間移動を可能にしている。この詩でギリシア以来の2000年の文化の崩壊を、ただ傍観するだけの'Rocky Face'——石のアイコン——を、YeatsのMask、即ち老齢の詩人が求めた不動の顔とすると、

Conduct and work grow coarse, and coarse the soul,  
 What matter? Those that Rocky Face holds dear,  
 Lovers of horses and of women, shall,  
 From marble of a broken sepulchre,  
 Or dark betwixt the polecat and the owl,  
 Or any rich, dark nothing disinter  
 The workman, noble and saint, and all things run  
 On that unfashionable gyre again<sup>(11)</sup>.

一応'unfashionable gyre'は慰めを与える様に見える。しかし既に二連目から何度も繰り返される'What matter?'で、彼がその時代の具現に直接関与し得ない故に、調子は次第に自棄的な兆候を帯び始め、ジェスチャーは大仰になる。そして時間が総てを造り壊すといった劇化する見方が明らかになって、登場人物も劇の進行に歩調を合わせる事が要求される。この考えが'Lapis Lazuli'の二連目になる。

All perform their tragic play  
 There struts Hamlet, there is Lear,  
 .....<sup>(12)</sup>

Yeats は次の連で連綿とした歴史の交代劇を述べるが、その前にあっては芸術品にさえ懐疑的になる。'Byzantium' で表現した 'golden nightingale' は、完成された永遠の象徴であった。ただ瑠璃——やはり石のアイコン——に刻まれた中国人は、たとえ芸術品である瑠璃が風化する運命にあって、歴史の舞台の生成を目撃するだけである。

There, on the mountain and the sky,  
 On all the tragic scene they stare<sup>(13)</sup>.

一見するとこの詩でもヨーロッパとアジアの対比がある。しかし Hamlet や Lear と中国人は、劇を演じる側と見る側の立場の違いだけで、歴史の劇の進行そのものには相違がない事を指摘しておこう。

'The Gyres' や 'Lapis Lazuli' の根底には劇意識がある。一般に劇には対立・葛藤が必要とされるが、実に Yeats の晩年の詩の特徴として劇化が挙げられる。彼にとって自己の世界が収縮するとき、残されるものは過程であり力の概念であった。彼は文明の衰頹を戦の欠如にあるとする。On the Boiler では

The danger is that there will be no war, that the skilled will attempt nothing, that the European civilisation, like those older civilisations that saw the triumph of their gangrel stocks, will accept decay<sup>(14)</sup>.

と述べ、こうして Yeats は英雄へ自己投影して行くことになる。英雄はイメージを追求し、死においてのみイメージを獲得することが出来る。このイメージの可視的部分は、英雄を取り巻く外部環境となり、それに戦を挑むのである。しかし英雄は主観的 (subjective) なので、自己の作り出したイメージの追求は、内部的戦ともなる。そして死がイメージを完結させるので、戦には必然的に敗れなければならない。つまり英雄は対照的であり、本源的な世界に置かれると、戦はいつも悲劇的なものになるのである。終末感と死が Yeats を悲劇的英雄にさせるのだが、戦は過程そのものであって目的には左右されない。更に戦には活力と意志が必要とされ、エネルギーの発散は悦びとなる。Yeats は悲劇を

Some Frenchman has said that.....tragedy (is the struggle)against an immovable ; and because the will, or energy, is greatest in tragedy, tragedy is the more noble ; but I add that 'will or energy is eternal delight', and when its limit is reached it may become a pure, aimless joy, though the man, the shade, still mourns his lost object<sup>(15)</sup>.

と定義しているが、この悲劇的法悦は Nietzsche からの影響であることは言う迄もない。Last Poems で Yeats は、意志することが創造であり、苦しみを悦びに変えるという Nietzsche 流の実践を試みている。

'The Gyres' や 'Lapis Lazuli' と同様にその主なものは初め *New Poems* に掲載されたものであるが、詩人の自己劇化であり、詩的エネルギーを希求する詩がある。'Those Images' では詩神の回復のためにイメージとして求められるのは、原始的・獣的なイメージである。そして老齢にあつてこれを阻むのが想像力の減退 'the cavern of the mind' である。この Blake の語句は 'An Acre of Grass' では、'the mill of the mind' という句に取り代わる。'An Acre of Grass' で老詩人は、Blake や Michael Angelo が知っていたという芸術家の激情を渴望する。しかしその熱狂的叫びは悲劇に彩られ、詩人のポーズは狂乱になっている。安楽な老境を拒否する 'the old wicked man' である Yeats は、又性的なものへと向い、情熱的な恋人の役を演じようとする。'The Spur'

You think it horrible that lust and rage  
Should dance attention upon my old age ;  
They were not such a plague then I was young ;  
What else have I to spur me into song?<sup>(16)</sup>

のように、Yeats が猥雑な老人の色欲を題材にするときもエネルギーの要請である。Koch によると Yeats は性的経験で、エネルギー、イメージアリ、複雑で悲劇的關係に組み立てられる人間の基本的二律背反を見いだそうとした<sup>(17)</sup>。(この意見は多分 'Three Bushes' と、続く一連の詩により当て嵌まるだろう。)しかし Yeats が Dorothy Wellesley への手紙で *New Poems* は 'nonchalant verse' であると書いているところをみると<sup>(18)</sup>、彼自身この詩集をあまり評価しなかったのではなかろうか。

## (3)

'The Circus Animals' Desertion' では 'Those Images' 等で呼び起こされる活力に反して、詩的想像力の枯渇が述べられる。そして第二部の3つの連で、Yeats は自己の文学経歴を回顧して、過去に歌われた詩材を数え上げる。彼はこの詩のタイトルとして、最初 'Despair' とか 'On the Lack of a Theme' という名を考えていたというし、現在の最終連は初め次の様であった。

O hour of triumph come and make me gay!  
If burnished chariots are put to flight  
Why brood upon old triumph, prepare to die ;  
Even at the approach of the un-imagined night  
Man has the refuge of his gaiety ;  
A dab of black enhances every white,  
Tension is but the vigour of the mind,  
Cannon the god and father of mankind<sup>(17)</sup>.

この連には、悦び・力・戦いといった語が一挙に現われている。とすると戦いを強要することによって、詩心の衰えを払拭しようとする脈絡全体に注意が向けられる。詩人の態度は相変わらず戦闘的である。最終行では *A Vision* で Michael Roberts が言う 'Love war because of its horror, that belief may be changed, civilisation renewed<sup>(18)</sup>。を Yeats は代弁するのだが、その必死の態度の背後に苦

悩が潜んでいるのが感じられる。仮にこの苦悩が *The Oxford Book of Modern Verse* で排除した受動的苦悩ならば、飽くまでも排除されなければならない。さらに第二部の締め括りで詩人を魅了したのは実は理想の外観であったに過ぎないと告白するので、この連の生み出す調子には断層があるという事はよく指摘される場所である。もう一つ、この連が本来 'A Bronze Head' の最後に付け加わる連として用意されていたという興味深い事実がある。Koch はこの部分の加筆は、それ迄の詩の展開に比べて余りにも 'didactic' な方向にあるという理由で、適切でないと結論している<sup>(19)</sup>。いずれにしても、'A Bronze Head' の最後にこの連を加えると、回顧に対して戦の讃歌となり 'Despair' と同じパターンになるだろう。この場合 '絶望' のなかでの破壊的な情感は、或る意味で受動的であると Yeats は感じたかもしれない。そこで 'The Circus Animals' Desertion' の最終連の本来の姿は

Those masterful images because complete  
Grew in pure mind, but out of what began?  
A mound of refuse or the sweepings of a street,  
Old kettles, old bottles, and a broken can,  
Old iron, old bones, old rags, that raving slut  
Who keeps the till. Now that my ladder's gone  
I must lie down where all the ladders start,  
In the foul rag-and-bone shop of the heart<sup>(20)</sup>.

となる。'ladder' という語が鍵であるが、'梯子' は上下の比喩に関係していて、下降は Yeats の現実直視を意味するからである。前の連では詩人は梯子の上にあったのである。ここで彼は一旦梯子から降りて、ボロや屑に目を向け、このボロや屑から再創造を始めようとする。筆者は最後の3行を積極的にそういう意味に解釈したい。前述したように Yeats は予てから、詩的エネルギーの発露は対立物の闘争にあるという信念を持っていた。既に 'ragged old man' であった彼は、どんなにグロテスクであろうと、闘争に必要な情熱を求め、その態度は一段と激しくなった。これが詩人が梯子の上にあったという意味である。しかし誠実な芸術家の創造は、現実を無視しては有り得ないし、題材はそこから出発しなければならない。そして出発にあたっては、激情は抑制されなければならない。Yeats は Dorothy Wellesley への手紙で、内に秘められるべき激情について次の様に語っている。

We have all something within ourselves to batter down and get our power from this fighting.  
I have never 'produced' a play in verse without showing the actors that the passion of the verse comes from the fact that the speakers are holding down violence or madness — 'down Hysterica passio'. All depends on the completeness of the holding down, on the stirring of the beast underneath<sup>(21)</sup>.

Yeats の詩では隣接する詩が意味を補完するので、'The Man and the Echo' を最後に見てみよう。

But hush, for I have lost the theme,  
Its joy or night seem but a dream ;  
Up there some hawk or owl has struck,  
Dropping out of sky or rock,



A stricken rabbit is crying out,  
And its cry distracts my thought<sup>(22)</sup>.

ここでも Yeats は、やはりテーマの喪失を述べ、悦びを吟味した後に弱肉強食の下界に心を動かすのである。

*Last Poems* ではコミットメントする場の不在から、Yeats は危機に直面していた。この時使われた‘石’の象徴は、‘Among School Children’での‘舞踊’の象徴の完全さを備えていない。(序でながら *Last Poems* には以前頻繁に用いられた‘dance’が少ないようだ。)だが彼にとって想像力の弛緩だけは避けなければならなかった。それが活力の讃歌となり、時に孤立した聖者のように、時に激しい恋人のように振舞った。しかし単に劇的に活力を高揚するだけで彼に解決の道を開くのだろうか。神話感覚の持主である Yeats は現実の肯定から始め、単一の事実の連続である歴史に循環性を持たせることによって再び神話に変質させなければならない。つまり神話には行為の繰り返しが意味されているからであるが、それが彼にとっての詩的創造の活路となるのであろう。斯くして‘The Circus Animals’ Desertion’のように、彼個人の歴史も回帰してそこから梯子を掛けなければならない事を悟る。しかも抑制された情熱を秘めた‘cold eye’を持ってであり、たとえ彼の詩的ヴィジョンが開かれなくてもである。

## 註

- (1) W. B. Yeats, *Selected Plays* (London : Macmillan, 1966), p. 159.
- (2) W. B. Yeats, *The Collected Poems of W. B. Yeats* (London : Macmillan, 1969), p. 410. 同書は以下 C. P. と略記。
- (3) W. B. Yeats, *Exploration* (London : Macmillan, 1962), p. 423.
- (4) C. P., p. 383.
- (5) Richard Ellmann, *The Identity of W. B. Yeats* (London : Faber & Faber, 1968), p. 184.
- (6) Daniel Albright, *The Myth Against Myth* (London : Oxford U. P., 1972), p. 157.
- (7) C. P., pp. 375-376.
- (8) W. H. オーデン「怒れる海—ロマン主義の海の図像学」沢崎順之助訳 79-80頁 1974年 南雲堂
- (9) Northrop Frye (ed), *Romanticism Reconsidered* (New York : Columbia U. P., 1963), p. 8.
- (10) A. G. Stock, *W. B. Yeats : His Poetry and Thought* (Cambridge : Cambridge U. P., 1964), p. 233.
- (11) C. P., p. 337.
- (12) *Ibid.*, p. 338.
- (13) *Ibid.*, p. 339.
- (14) W. B. Yeats, *Exploration* (London : Macmillan, 1962), p. 425.
- (15) *Ibid.*, p. 449.
- (16) C. P., p. 359.
- (17) Thomas Parkinson, *W. B. Yeats : Self Critic & The Later Poetry* (Berkeley and Los Angeles : California U. P., 1971), p. 174. より、
- (18) W. B. Yeats, *A Vision* (London : Macmillan, 1962), pp. 52-53.
- (19) Vivienne Koch, *W. B. Yeats : The Tragic Phase* (London : Routledge & Kegan Paul, 1968), pp. 84-85.
- (20) C. P., p. 392.
- (21) Denis Donoghue, *Yeats* (Fontana : Collins Sons & Co., 1971), p. 131. より引用。
- (22) C. P., p. 395.

(本学助手・旭川分校)